|  |  |
| --- | --- |
| 会議の結果 | |
| 件　　　名 | 令和４年度田辺市社会教育委員会議　第５回定例会 |
| 日　　　時 | 令和５年１月30日（月曜日）　　10時15分～11時45分 |
| 場　　　所 | 田辺市民総合センター　４階交流ホール |
|  | ○社会教育委員  出席者10名：　松場議長、稲垣委員、加藤委員、九鬼委員、小山委員、近藤委員、  坂本委員、砂野委員、中根委員、西川委員  欠席者３名：　尾崎副議長、佐久間委員、柳川委員  ○事務局７名：　佐武教育長、前川教育次長、狼谷生涯学習課長、那須生涯学習推進係長  尾﨑公民館係長、小林公民館係主査、小出生涯学習推進係主査 |

１．開会　教育長挨拶

２．議長挨拶

３．説明事項・報告事項

（１）第22回和歌山県市町村対抗ジュニア駅伝競走大会について

（２）第49回新春田辺長距離走大会の結果について

（３）南方熊楠顕彰館の行事予定（２～３月）について

（４）令和４年度二十歳を祝う式典の結果について

以上の項目について、事務局より一括して説明及び報告を行った。

質疑応答はなかった。

４．協議

（１）生涯学習推進計画について、事務局より報告を行った。

【質疑応答・主な意見】

Ａ委員：第４章「計画の推進に向けて」が57ページからとなっていますが、配付された資料に見当たりません。前期と同じ内容だから資料に含めていないということでしょうか。

事務局：第４章について、意図的に資料から外したわけではなく、組み合わせの際に漏れてしまったようです。資料に不備があり、申し訳ございませんでした。

Ｂ委員：前回の定例会での意見を大体取り入れていただき、ありがとうございます。特にありがたいのは、西暦と元号を併記していただいたことで、計算がしやすくなりました。一点だけ、48ページの学習活動を支える人材の育成のところで、５行目「そのため、これまで、市民を対象とした地域コーディネーター養成講座や、まちづくり市民カレッジ、縁パワーメント学等の人材育成講座を実施し、地域人材の育成に取り組んでいます。」とありますが、「縁パワーメント学等の人材育成講座を実施してきました。今後も引き続き、地域人材の育成に取り組んでいきます。」としてはいかがでしょうか。

事務局：計画の組み立てとして、まず現状と課題、ここでは、これまでやってきたことや成果、今どのような状況にあるかといったことを整理し、課題を挙げた上で、次にある施策の展開でこれから取り組んでいく方向性を示す構成となっています。そして、その次に主な取組を挙げるという組み立てとなっていますので、いただいたご意見を踏まえて修正するのであれば、ご指摘いただいた箇所の文末を「取り組んでいます。」ではなく「取り組んできました。」とするのが適切かと考えております。これからも取り組んでいくということについては、現状と課題の内容としてはそぐわないような構成となっているかと思います。

Ｂ委員：「取り組んできました。」ということであれば、問題ないかと思います。

議長：「取り組んできました。」という表現が妥当かと思います。

Ａ委員：同じページですが、「縁パワーメント学」とあります。知らないのでお聞きしますが、どのような事業だったのでしょうか。女性のエンパワーメントであれば、カタカナで表記しますが、縁という漢字を用いて「縁パワーメント」とあるので、どのような取組をされていたのか教えていただけますでしょうか。

事務局：当時の担当職員が事務局にいないため、詳細について、この場ではっきりと申し上げられませんが、ここでは、過去に社会教育委員の皆さんと取り組んだ人材育成事業を挙げており、「縁パワーメント学」という名称で実施した事業を記載しています。当時のことをご存じの委員もいらっしゃるかと思いますが、いかがでしょうか。

Ｂ委員：防災などの面で、お互いの縁をつないで、力を付けていくということだったように記憶して　いますが、Ｃ委員どうだったでしょうか。

Ｃ委員：市のホームページにそういった取組経過が蓄積されているので、現在確認しています。記憶にあるところでは、市民カレッジをやった後の取組で、いくつかテーマがあって、防災だけでなく、起業もテーマとしてあったように思います。たしか、有井さんを招いた記憶があります。生業という観点で、事業を起こしましょうという取組もやったと思います。ただ、縁パワーメント学は市民カレッジ修了生向けに少人数で実施して、大々的にはやっていなかったと思います。それで、我々の記憶にもあまり残っていないのかもしれません。

Ｂ委員：縁パワーメント学は、グループワーク、ワークショップが中心で、さらに力を付けるといった観点で、市民カレッジ修了生向けに少人数で実施したという記憶はありますが、長年、社会教育委員としていろいろとやってきたので、細かな内容までは覚えていません。

Ｃ委員：市ホームページによると、地域コーディネーター養成講座が３年、その後、まちづくり市民カレッジが３年、縁パワーメント学は２年実施しています。縁パワーメント学に関して、平成26年度は「地域の未来づくり～地域に生業を築く～」というテーマで数回実施しています。広く市民に受講してもらうという形態ではなく、地域コーディネーター養成講座や市民カレッジを修了した方のエンパワーメントだったかと思います。平成27年度は、「地域の未来のつくり方～協働による「ひと」づくりと「しくみ」づくり～」というテーマで実施しています。それから先は、市民カレッジ＋となって、広く募集する形態に戻っています。

議長：漢字を用いた「縁パワーメント」という表記は一般的ではないと思うので、計画を読んだ方は同じような疑問を持たれる可能性もあるかと思いますが、その場合、講座名にカギ括弧をつけるという表記上の対応で解決できるでしょうか。

Ｃ委員：わかりづらいということであれば、固有名詞であることが分かるように括弧書きをしてもらえればいいかと思います。

議長：固有名詞扱いで括弧をつけて表記してもらえればわかりやすいかと思うので、事務局でご検討をいただければと思います。

事務局：ありがとうございます。いただいた意見を踏まえ、修正を検討します。

Ａ委員：50ページ、⑳公民館運営体制の充実の「施策の展開」と「主な取組」に関して、他の項目では、「施策の展開」と「主な取組」が同じような内容でも言葉は少し変えて書かれていますが、この部分は同じ言葉で書かれています。この点については、そのままでよいのでしょうか。

事務局：ご指摘の件につきまして、本来であれば、施策の展開で取り組んでいくことの方向性を示し、主な取組で具体的な取組を記載するという構成となりますので、主な取組の中で、もう少し具体的な内容を記載できないか、再検討したいと思います。

（２）人材育成事業企画部会について、事務局より報告を行った。

【質疑応答・主な意見】

Ｂ委員：質問ではないですが、12月24日付の紀伊民報の「記者と振り返る2022」という記事において、神島高校のことや中芳養中学校の梅の収穫からジャムの加工・販売を手掛けたということを取り上げていただきました。協議資料にも書かれていますが、是非とも次年度以降も中学校・高校への出張講座を継続的に実施して、横の広がりを持っていけば、少しずつ違ってくるのではないかと期待しています。

Ｄ委員：今年、中芳養中学校では、尾崎さんに関わっていただきながら、梅ジャムの加工や、弁慶市で梅ジャムの販売をさせていただき、最後は人材育成講座で山本さんにお話をいただきました。本当に充実した学習ができて、本当にありがたく思っています。資料にあるように、来年度も中芳養中学校だけではなく、いろんな学校で広めていただけたらありがたいと思いました。もうすぐ三年生が卒業を迎えますが、コロナやインフルエンザの関係で卒業式も縮小気味での実施となる予定です。特に今思うことは、この三年生は一年生のときから２か月休校でスタートして、その後もなかなか思うようにいかない中での三年間でしたが、そうした制約が多くある中でも、子供たちが考えながら、できることをしっかりやって、学ぶことを学び、地域の中でできることを、今回のように場を設定していただく中で実施できた三年間だったかと思います。先ほどありましたように、５月８日から５類に変更されるということで、学校の動きも活発になってくるかと思いますが、引き続き来年度以降も協力いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

議長：皆さんのご意見を伺いたいと思いますので、順番にお話をいただければと思います。

Ｅ委員：私も今年度、中芳養中学校と神島高校の出張講座に参加させていただきました。先日の人材育成事業企画部会でもお話したことですが、高校生に限らずとも、中学生を対象にこういった事業を実施し、学習をしてもらうことで、将来のことに対して意識を持ってもらえるのではないかと思っています。自分の子供もそうですが、何となく学校へ行って、何となく親の意向を受けて高校を選んで受験している子供が大多数だと思っています。今、社会教育委員として、こうした取組をさせてもらっていますが、そのことに反して、おそらく子供は三年後に外へ出て行ってしまうのだろうと思います。中学、高校の段階で自分の進路や意向が決まっているという子供はほとんどいないと思うので、そこの一つの手助けになればいいなと思っています。それが最終的に、いわゆる人材育成としての地元の人口減少に歯止めがかかり、若い人が田辺に残ってもいい、残って何かしたいという部分につながっていけばいいと思います。

Ｆ委員：小さいときから地域を知るということは、大人にとっても子供にとっても非常に大事なことで、地域を愛することで地域が強くなっていく、企業も強くなっていく、そんなことを最近特に感じます。今、市長が言っている「田辺ＯＮＥ未来構想」、それを商工会議所でも真剣に取り組んでいて、いろんなところで田辺ＯＮＥということで一つにして地域を高めていこうという傾向が出てきているように思います。最近になって、委員会ができて、いろんな形で商工会議所にも降りてきていて、本気で考えていく時期に来ていると感じています。その中で、子供たちをなおざりにできないと思っています。子供たちが強くなることで、企業も強くなり、地域力も強くなるととても感じるので、Ｄ委員がおっしゃられたように中学校でそういった取組をしていただくなど、先生方も大変かと思いますが、もっと若い人、子供たちと一緒に何かしら作っていけるようなきっかけや提案をして、いろんなところとつながっていけたらと特に感じます。

Ｃ委員：人材育成事業ですが、尾崎さんから以前メールをいただいて振り返りながらですが、特に地元定着に関する実態調査に関して、どれだけ帰ってきているのかということは、なかなか把握が難しくて、大学も把握できていません。卒業時、どこに行ったかは把握できても、三年後そこにいるのかはわからないという状態です。今、田辺にいる学生の実態把握は、27日の勉強会で学生の想いや意向を一定聞けるかと思っています。部会でも話しましたが、技術的にできるのかはともかく、本当に帰ってきているのか、その子がどうなったかということを５年くらいかけて追跡調査し続けるというのは、おそらくどこもやっていないと思うので、一度、田辺で人づくり事業のエビデンス、根拠を求める取組としてやってみたら面白いのではないかと考えています。和歌山県はデータセンターを誘致しているので、上手く連携して、地方創生施策や大学の研究予算などを活用できれば、田辺はもう一段面白くなると考えています。田辺市は、人づくり事業でいろいろやっていて、たなべ未来創造塾も含めて対外的にも着目されていますが、次はその根拠まで求め始めたということになれば大変面白いし、それが社会教育委員から発することができればもっとすごいと思うので、そういったことができればと思います。基本的な取組については、継続的に着実にやっていきましょう。

Ａ委員：今回、資料を速達で届けていただきました。事前に送付いただいたら会議までにしっかりと読ませてもらっています。期日がある中で、事務局の方は大変だと思いますが、仕事と思って頑張っていただきたいです。委員として、資料をしっかり読んで、会議に出席する。とりあえず読み流して行けばいいという社会教育委員会議ではないと思っています。委員の皆さんは、しっかりと資料に目を通し、この会議へ出ようと思ってくださっていると思いますので、事務局の努力は決して無駄にはならないと考えています。田辺ＯＮＥ未来構想ですが、海側のことだけで山側のことは考えられていないと、私たち山間部の住民は認識しています。午後に市長と会う機会があるので、そのことを伝えたいと思います。

Ｇ委員：どれだけの若者が田辺に残るかといったことにはとても興味があります。身近なところでは、二十歳になった甥っ子がいて、実際に今、地元で就職しています。聞くと、祭りがしたいというのが、地元就職の一番の理由でした。コロナ禍で祭りも２年間は神事のみでしたが、今年は制限を設けた上で祭典を実施することになり、次世代に笛や太鼓の神楽を伝えるきっかけがこのままなくなってしまうのではないか、そうならないように今年はぜひやりたいという声が、地元に住んでいる20代から40代の子育てしている親を中心に挙がって、実施することとなりました。もし龍神で自慢大会をするのであれば、この実行委員会の方々が相応しいと勝手に思っています。その地区は高齢者が多いので、これまでの２年間は神事のみとしていたのだと思いますが、高齢者からも祭りの太鼓の音を聞きたいから今年はやってほしいという声も挙がっていて、そのくらい地域に根付いた行事だったということを改めて感じた機会でもありました。自分の子供も太鼓を叩くようになって、興味を持つようになったのでよかったと思っています。普段は仕事で若者の就労支援をしていますが、斜めの関係性が大切だと思っています。親と子供、先生と生徒だと上下の関係になってしまうので、お互いに言いたいことを伝えるのが難しい面がありますが、斜めから褒めることができるというのは地域の力でもあると思っていて、実際、甥っ子とも斜めの関係で、上手くやりとりできたと思っています。そうした中で、地元に残ってくれたのは嬉しく思っていて、そういう若者が増えてくれれば嬉しいです。

Ｈ委員：Ａ委員から会議資料のお話があり、悪いなと思いますが、私は全く読む暇がありません。私は、子供が三人いて、長男と長女は京都に出ていますが、次男は帰ってくるという話になっています。子育てと仕事に追われて、上の二人はどこにも連れていけず、田辺も本宮もあまり知らないうちに育っていきました。三人目で余裕が出てきたので自然に触れさせようと、南紀子供ステーションに所属して、いろんなところで遊ばせてもらいました。こんなに自然があるのにどうしてみんな自然で遊ばないのか、また、この自然を子供に伝えていかないといけないと常々思っていて、自然教室も10年くらいやっていますが、来る子供が本当に少ない。山や海で勉強しながら遊ぶということを推進してあげたら、もっと居たい、住み続けたいという人が増えると考えています。産業も大切ですが、そうした教育をやってもらいたいと思います。他にない自然が本宮にはあって、守っていかなければならないと考えています。ただ、本宮には本当に何も産業がなくて、仕事がない、自分の子供が帰ってきても、他の子供がいるのかと疑問に思うところもあります。子供を呼び寄せるというのは難しいかもしれませんが、魅力を伝えるということを重点的にしていきたいと思います。

Ⅰ委員：冒頭に記事の紹介をいただきましてありがとうございます。おかげさまで、仕事ベースにはなりますが、学校の取組を記事として取り上げて、読者に知ってもらう、それによって生徒に評価として伝わるというサイクルが上手くできていると思っています。こういうことができるのも、田辺市の教育関係、産業関係、私共の新聞でさせていただけるという諸条件が整ってのことだと思いますので、これは田辺市の特徴というか、いいところではないかと手前味噌ながら思っています。各委員からお話を聞く中で、子供たちの進路・将来を考える、大人が考えることも大切ですが、やはり子供の主体性も大切だと思いますので、田辺市であればいろんな選択肢がある、都会へ出てもいい、地元に残ってもいい、地元に残るか、都会に出るかという判断材料が豊富であることは、どちらにしても必ずプラスになると考えています。選択肢・学習機会の多さというのは拡大を続けていくことがこの地域にとっても大切だと考えています。また、各地域の自然や祭りにおいても、この地域に生まれたアイデンティティを育むということを大切にしていけば、両輪となって、この地域に戻ってくる、もしくは地域に資する人材に子供たちがなるのは必定だと思います。できれば、公民館が地域のそういった細かいアイデンティティを育てる場になればと思っています。私も、田辺祭の中屋敷のお宿を務めさせていただいて、面目を保ったわけですけれども、祭り一つ、地域一つとっても、それぞれ固有の文化がありますから、公民館でも考えていただけたらと思います。

５．その他

　　　「令和３・４年度　社会教育委員会議のまとめ」について、事務局より説明を行った。

質疑応答はなかった。

６．閉会　議長挨拶